

房総半島の古代集落遺跡に見る人口動態

萩原 恭一

目 次

1. はじめに	265
2. 遺跡別に見た竪穴住居面積と想定人口	266
3. 古代の房総半島における人口動態	272
4. 人口動態の背景	276
5. おわりに	278

1. はじめに

房総半島における古代集落遺跡の調査例は、すでに膨大なものになりつつある。このうち、土器の編年、墨書土器の集成などの特定遺物の集成といったかたちでの検討は、現在の時点においてかなりの程度まで進んでいる。しかし、それらの集落全体をとりまとめた上での解析作業は、わずかしかが行われていないのが実体である。そのうちの稀少な例として、大野康男氏による八千代市萱田遺跡群の検討を挙げることができる(大野1991)。大野氏はこの報告書の中で、時期別に見た竪穴住居の軒数の変遷を、各遺跡別および萱田遺跡群全体の双方で割り出している。これにより、竪穴住居の時期別消長が視覚的にも明確にされた。大野氏によれば、萱田遺跡群は8世紀中葉から10世紀初頭までが古代集落としての存続期間で、土器編年のうえで8期に分けることができるという。そして、8世紀中葉に集落形成が開始された萱田遺跡群は8世紀後半に一時竪穴住居数の減少期を見るが、9世紀初等には再び竪穴住居数を増やし、かつ、この時期が萱田遺跡群における竪穴住居数の最盛期でもある。以後、9世紀前半を通して萱田遺跡群の竪穴住居数は安定多数の時期を過ごす。9世紀中葉以降、萱田遺跡群の竪穴住居数は直線的な減少傾向を見せ始め、10世紀初頭を以て、萱田遺跡群は古代集落遺跡としての営造期を終了するのである。

そこには国家による政治的影響というものを読み取らなければならないであろうし、同時にそれだけでは律しきれない部分も読み取らなければならないのかも知れない。私も、かつて東金市久我台遺跡の報告で、同遺跡の集落の展開を分析したことがある(萩原1988)。時期別に見た竪穴住居の面積を集計して、人間ひとり当たりの単位居住面積を想定して、20年単位での平均人口を算出し、人口動態を見るというものであった。これは、松村恵司氏が山田水呑遺跡の報告の際に行った分析方法(松村1977)を踏襲したものである。久我台遺跡の人口動態を解釈する上で、私は背景にある政治的、社会的変動というものが、ほとんど直接的にそこに現れていると判断した。この考えは、現在でも変わっていない。しかし、それは久我台遺跡という、規模は大きいにしても、九十九里地方という当時の房総半島において決して中心地でも何でもない地域の、わずか一遺跡の解析から得られただけの解答でしかなかった。

今回、房総半島の古代集落遺跡すべてを網羅することは無理であるが、より広い地域のより大きい古代集落を選別し、検討することにした。これによって、久我台遺跡で得られた解析結果がより普遍的なものであるかどうかを検証してみたいのである。

さて、その選別に際しては、次の点を重視した。それは、構造的に見て竪穴住居を主体としている集落遺跡を検討対象としたということである。最近、房総半島においても、多くの掘立柱建物群を伴う古代集落遺跡が幾つも検出されるようになって来た。久我台遺跡の報告中でも

述べたが、竪穴住居のみを以て居住面積を算出する方法に対しては、批判的な意見をお持ちの方が多いだろうと思う。群馬県子持村の黒井峰遺跡の調査以来、平地式住居の存在する可能性、掘立柱建物の機能の問題、さらには竪穴式住居の機能についての一律的な扱いに対する疑問(渡辺1992)など様々な問題が提起されている。このうち、平地式住居の存在可能性については、房総半島ではそれほど問題視しなくてもよいであろうと考えている。久我台遺跡の報告の際にも述べたように、古墳時代の遺構外検出遺物量に比べて、歴史時代の遺構外(竪穴住居の外を意味する)検出遺物量は少ない場合が多いのである。これは、平地式住居としての認識が困難な場合においても、それが存在していた場合、遺構外検出遺物量に反映されるはずだという理由に基づいている。次に、掘立柱建物の機能の問題である。従来のように竪穴住居を主体として、その中にわずかな掘立柱建物が混在するというのであれば、その機能は居住施設以外一特に収納・貯蔵施設と考えて、ほぼ間違いないものであったろう。しかし、掘立柱建物を主体とする遺跡においては、どの掘立柱建物が収納・貯蔵施設で、どの掘立柱建物が居住施設であるかを判断するのは、今の段階ではかなり無理を伴う作業である。従って、今回の検討対象からは基本的に除外することにした。最後に竪穴住居の住居としての一律的な取り扱いに対する問題である。世界の民族例から見た場合、同時存在の建物が全て同時に使用されているとは限らないし、全く同じ機能として使用されているとも限らない。これは事実である。では、遺跡を解析する上においてどのように分離決定するのであろうか。これも解答は出ていない。このような状況であるので、頑迷な解釈かも知れないが、同時存在の竪穴住居はすべて同時に居住機能を果たしていたと解釈して検討を進めることにする。

2. 遺跡別に見た竪穴住居面積と想定人口

本論文の検討対象として、八千代市村上込の内遺跡、印旛郡印旛村油作第2遺跡、成田市匝護台遺跡、東金市久我台遺跡、そして千葉市高沢遺跡を選んだ。選定基準は、先に記したように掘立柱建物の比率が高くない集落遺跡であること、それに面的な調査が行われていて全体の様相がほぼ確定できる集落遺跡であること、の大きく二点である。

1. 八千代市村上込の内遺跡

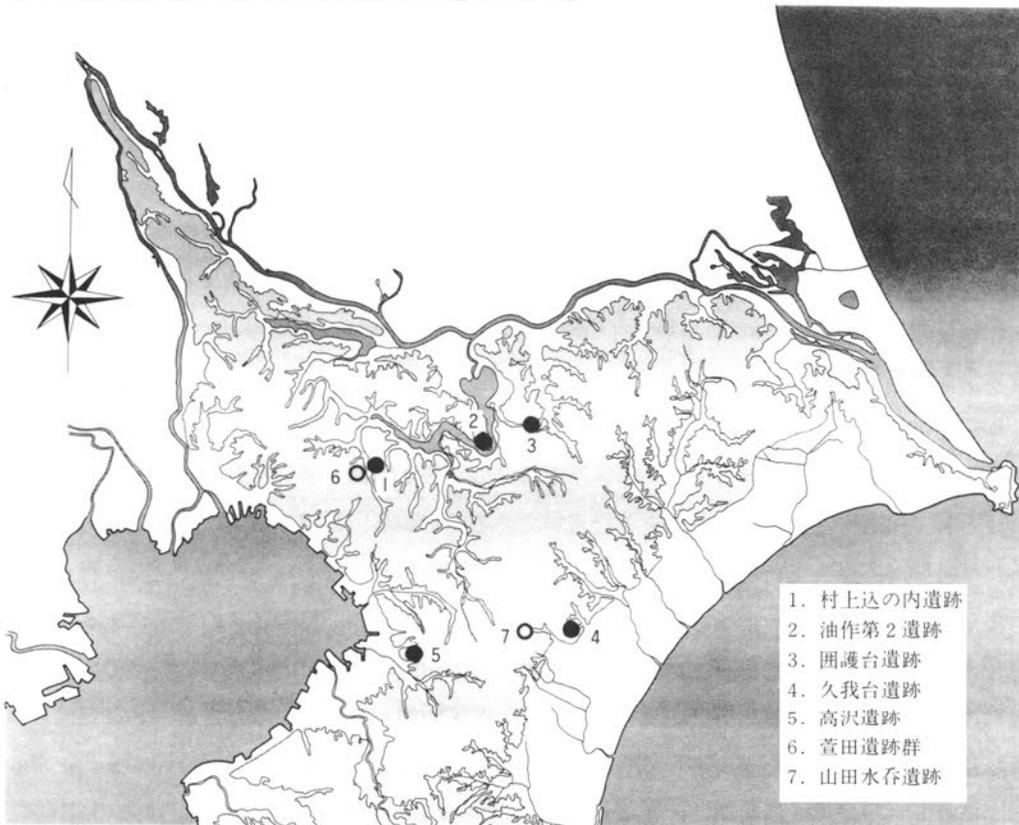
前章において取り上げた八千代市萱田遺跡群と同様に、8世紀に入ってから集落の形成が開始される集落遺跡である。8世紀第2四半期において住居軒数の増加があり、9世紀前葉に集落の最盛期を迎え、9世紀いっぱいをもって集落の形成が終了する遺跡である。遺跡は住居の集合状況からみて5群に分けられ、また9世紀中葉頃から2×2間、2×3間の側柱構造の掘立柱建物が若干建てられる。この遺跡で注意を惹くのは、一軒あたりの平均面積が全体に小さ

いのであるが、それが時代が下るにつれて竪穴住居一軒あたりの平均面積が若干ずつ増加するという現象である。

2. 印旛村油作第2遺跡

印旛沼が大きく二つに分かれる括れ部で、沼に向かって西側から突き出た台地上に形成されている。一ノ台・仲ノ台・駒込遺跡などと遺跡群をなしている集落遺跡である。この3遺跡は大まかに見て一ノ台遺跡→駒込遺跡→油作第2遺跡といった集落の移動が想定できる面白い遺跡群である。このうち油作第2遺跡は古墳時代後期に至って突如大規模遺跡へと変容する集落遺跡である。

油作第2遺跡は6世紀後葉に急に竪穴住居数20軒という集落になり、次の7世紀前葉において集落としての最盛期を迎えるのである。その後は急激に縮小し、8世紀第2四半期において若干の増加を見せるが又急激な縮小を見せる。そして9世紀後葉において竪穴住居ならびに掘立柱建物の増加を見せ、10世紀初頭をもって終了する遺跡である。途中での集落規模の劇的な拡大・縮小は周辺遺跡との関連からでは現在のところ解決できず、今回の分析対象とした遺跡の中では特殊な傾向を示す解釈の難しい遺跡である。



第1図 検討対象遺跡位置

3. 成田市囀護台遺跡

公津原遺跡群や郷部北遺跡群に近接しており、周辺は奈良・平安時代の一大遺跡群である。本遺跡も含め、これらの遺跡群は印旛沼に近接しているにも関わらず、利根川に向かう根木名川水系の谷筋に面している。本来ならばこれらの遺跡群との関係を明確にした上で遺跡の分析を行わなければいけないのであるが、郷部北遺跡群が未報告である上に、公津原遺跡群に関しては今回細かな統計をとる時間が持てなかった。中途半端ではあるが、ここでは囀護台遺跡の分析にのみ留め、公津原遺跡群についてはいずれ改めて解析の対象としたい。

本遺跡は6世紀第2四半期に集落の形成を開始し、7世紀第3四半期に急激な拡大を見せ、8世紀第3四半期に住居軒数・面積ともに最盛期を迎える。そして9世紀第2四半期頃から減少傾向に入り、9世紀いっぱいをもって集落のいとなみを終了するのである。

4. 東金市久我台遺跡

周辺では妙経遺跡が細尾根続きに北西側に広がっている。集落の展開様相など、本遺跡との比較の上においても非常に魅力的な資料であるが、正式報告は本書と同時の刊行であり、報告書を用いての解析の対象とはなし得なかった。

久我台遺跡は舌状台地上にあり、その東側2/3が調査されずに破壊されてしまっているために、調査地の結果からすべてを復原するには若干危険を伴う資料ではある。集落の形成開始時期は6世紀半ばで、次の第二段階であるところの6世紀後葉において集落規模を一気に拡大している。7世紀後葉から8世紀初頭にかけて一時的に規模の縮小傾向を見せるが、次の段階には再び増加傾向に戻る。ただし、8世紀後葉からは長期縮小傾向に向かい始める。9世紀後葉に一時住居軒数のみは若干の増加を見せるものの、人口的には最盛期には及ぶべくもなく、10世紀代において集落の形成はほぼ終了する⁽¹⁾。

5. 千葉市高沢遺跡

周辺は小支谷を隔てた西側が有吉遺跡、逆に東側が南二重堀遺跡である。千葉東南部ニュータウン内の遺跡群は、囀護台遺跡・公津原遺跡群の関係と同様に個別検討だけでなく、組み合わせとして検討する上においても重要な資料である。しかし、今回そのすべてを検討対象とするには時間が不足していたために、やはり本遺跡のみを検討対象として取り上げてみた。

集落の形成は6世紀前葉から開始されるのであるが、本遺跡の特徴はこの段階にある。住居軒数・総面積ともにほぼピークに次ぐものであり、この段階において本遺跡に向けての大きな人口の流入が想定できる。7世紀代全体を通じて若干の縮小傾向が見られるが、8世紀代には再びやや盛り返すのである。そして9世紀の中葉において住居軒数は最盛期を迎える。ただし総面積は6世紀後葉の最盛期には遠く及ばず、本遺跡は10世紀前半をもって終了するのである。



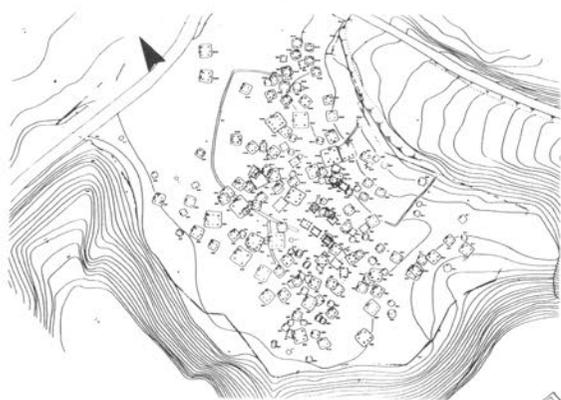
第2図 村上込の内遺跡 (S:1/4,000)

表1 村上込の内遺跡

暦年代	a 竪穴住居数	b 総面積 (m ²)	c 人口 b:2.7:1	d 20年間の 平均人口	e 住居平均 面積 (m ²)
600					
	16	173.9	64.4	39.0	10.8
	23	230.7	85.4	51.7	10.0
700					
	65	731.2	270.8	164.1	11.2
	31	404.7	149.9	90.8	13.0
800					
	20	260.5	96.5	58.4	13.0
900					

表2 油作第2遺跡

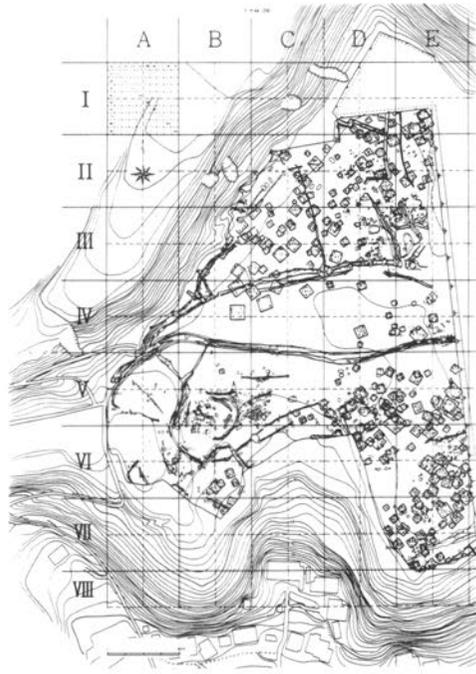
暦年代	a 竪穴住居数	b 総面積 (m ²)	c 人口 b:2.7:1	d 20年間の 平均人口	e 住居平均 面積 (m ²)
600	20	690.0	225.5	136.6	34.5
	46	1,719.9	637.0	386.0	37.3
	16	401.2	148.6	118.8	25.0
700	4	104.1	39.3	39.3	26.0
	4	101.0	37.4	37.4	25.2
	3	66.0	24.4	24.4	22.0
	9	132.6	49.1	49.1	14.7
800	1	19.8	7.3	3.6	19.8
	3	50.5	18.7	18.7	16.8
	1	14.4	5.3	2.1	14.4
900					
	28	396.4	146.8	41.9	14.1



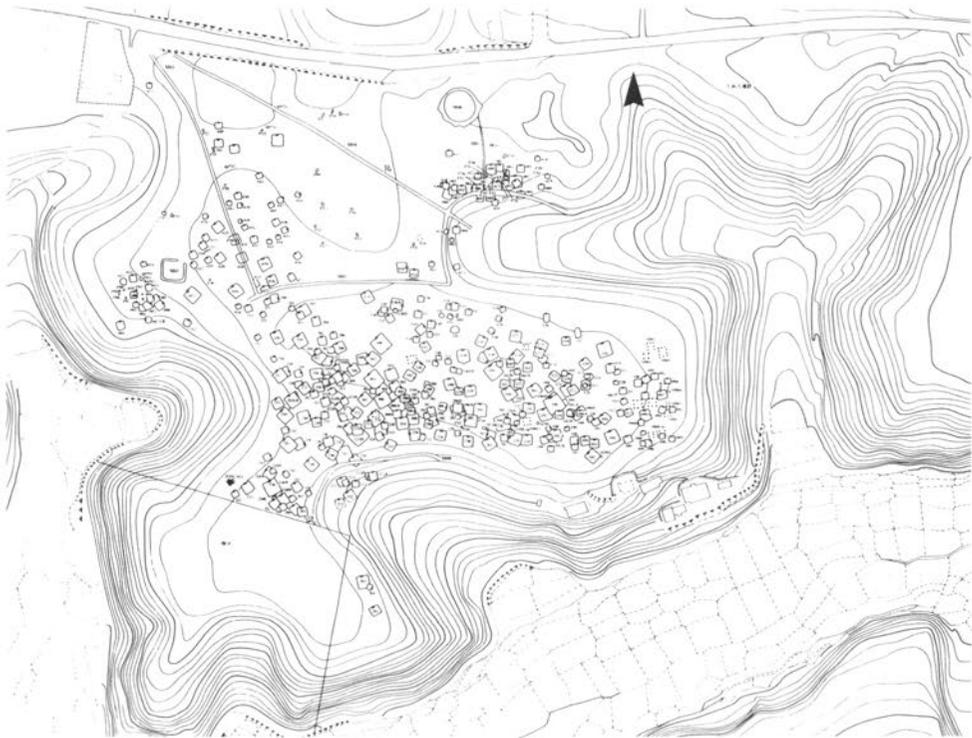
第3図 油作第2遺跡 (S:1/4,000)



第4図 囲護台遺跡 (S:1/4,000)



第5図 久我台遺跡 (S:1/4,000)



第6図 高沢遺跡 (S:1/4,000)

表3 囲護台遺跡

暦年代	a 竪穴住居数	b 総面積 (m ²)	c 人口 (b/2.7=人)	d 20年間の 平均人口	e 住居平均 面積(m ²)
600	4	113.3	41.9	33.5	28.3
	16	497.1	184.1	147.2	31.0
	17	507.4	187.9	150.3	29.8
	29	783.5	290.1	232.1	27.0
	26	574.6	212.8	170.2	22.1
	54	1,057.3	391.5	313.2	19.5
	54	1,096.7	406.1	324.9	20.3
700	46	1,115.9	413.2	330.6	24.2
	46	1,106.7	409.8	327.9	24.0
	71	1,159.4	429.4	343.5	16.3
	63	955.0	353.7	282.9	15.1
800	58	813.7	301.3	241.0	14.0
	38	545.3	201.9	161.5	14.3
	15	197.7	73.2	58.5	13.1
	7	90.8	33.6		12.9
900					

表4 久我台遺跡

暦年代	a 竪穴住居数	b 総面積 (m ²)	c 人口 (b/2.7=人)	d 20年間の 平均人口	e 住居平均 面積(m ²)
600	9	281.8	104.4	69.3	31.3
	31	1,276.5	472.7	189.1	41.1
	31	868.9	321.8	128.7	28.0
	18	413.6	153.2	122.5	22.9
	12	248.0	91.8	73.4	20.6
700	27	439.5	162.8	130.2	16.2
	30	506.4	187.5	150.0	16.8
	12	141.9	52.5	42.0	11.8
	15	199.6	73.9	29.5	13.3
800	19	300.2	111.1	44.4	15.7
	13	150.0	55.5	22.2	11.5
	6	67.4	24.9		11.2
900					

3. 古代の房総半島における人口動態

以上が古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての、房総半島における代表的な大集落遺跡5遺跡からの人口動態復原試算の結果である。ここでは、はじめにも述べたとおり大野氏が萱田遺跡群において集落の変遷を復原しているので、その成果も利用させてもらいながら、表題のとおり古代の房総半島における人口動態を復原してみたい。

1. 遺跡の類型

本稿で扱った5遺跡の他に大野氏の萱田遺跡群をも含めて考えた場合、集落遺跡の類型には大きく分けて三種類があることが分かる。まず八千代市村上込の内遺跡や同市萱田遺跡群に代表されるような、8世紀になって突如として集落形成が開始される型である。次にその他の5遺跡に見られるように、古墳時代後期から大型集落を営み始め、平安時代前葉乃至前半におい

表5 高沢遺跡

暦年代	a 竪穴住居数	b 総面積 (m ²)	c 人口 (1.27m人)	d 20年間の 平均人口	e 住居平均 面積(m ²)
600	37	1,128.5	417.9	253.2	30.5
	13	503.1	186.3	112.9	38.7
	37	1,279.1	473.7	287.1	34.5
	18	495.7	183.6	111.2	27.5
	13	386.6	143.1	86.7	29.7
700	7	169.7	62.8	38.1	24.2
	30	676.1	250.4	151.7	22.5
	32	442.1	163.7	99.2	13.8
800	21	299.8	111.0	67.2	14.2
	19	257.6	95.4	57.8	13.5
	52	719.0	266.3	161.4	13.1
900	20	208.8	77.3	46.8	10.4
	4	36.7	13.5	8.2	9.1

て集落の形成を終了させる型とである。村上込の内遺跡や萱田遺跡群と同様の推移を見せる遺跡として、東金市山田水呑遺跡を挙げることができる。このほかに、掘立柱建物の棟数が多いため本稿での分析対象から除外した袖ヶ浦市永吉台遺跡群などに代表されるように、集落の形成時期がさらに遅れる型もある。永吉台遺跡群のうち遠寺原遺跡は8世紀第3四半期が集落の開始時期で10世紀第2四半期以降で集落の終焉を迎え、一方の西寺原遺跡では9世紀第3四半期に集落の形成を開始し、10世紀いっぱい集落の形成を終了している。この二遺跡は煙道の長いカマドを有する住居が大半を占め、さらに遠寺原遺跡では集落内寺院もしくはそれよりも一等上級の寺院跡と考えられる遺構群が検出されている。

これらの様相を大きく分類すると、

a：古墳時代後期から形成を開始する拠点集落

b：8世紀以降に形成を開始する集落

└ i 8世紀前葉に形成を開始する集落

└ ii 8世紀後半以降に形成を開始する集落

というようになるであろう。それではこれらの

類型は集落の変遷においても類型的様相を見せるであろうか。ここで再度類型別に竪穴住居の数・面積・推計人口の変化を見てみたい。

2. 類型別にみた人口動態

〈a類型〉

この類型に当てはまるのは油作第2遺跡、囲護台遺跡、久我台遺跡、それに高沢遺跡である。

まず、集落の形成開始時期は高沢－囲護台－久我台－油作第2遺跡の順となっており、みな6世紀代に開始している。高沢遺跡と油作第2遺跡の間には半世紀の較差が生じているが、囲護台遺跡と久我台遺跡の開始時期はかなり近いものである。

さて、次に集落としての最盛期がそれぞれどこにあるかという問題である。油作第2遺跡は

7世紀の第1四半期に極端なピークを見せ、7世紀後葉以降はかなり貧弱な集落に変化してしまう。圀護台遺跡は山形のきれいな曲線を作り、8世紀の第2・3四半期にピークがある。久我台遺跡は6世紀後葉にピークがあり、次のピークは8世紀第2・3四半期である。高沢遺跡は6世紀の後葉に最大のピークがあり、次が8世紀前葉、そしてさらに9世紀中葉に再度ピークを迎えるのである。このように見ていくと、成田市圀護台遺跡と東金市久我台遺跡がかなり近似した波を見せる遺跡であることが分かる。4遺跡の中では印旛村油作第2遺跡が最も特殊な集落の変遷を見せている。先述のとおり、これがいかなる理由によるものかは現時点では即断できないが、集落拠点の移動を考えるのが最も自然であろう。

次に集落の終焉時期の問題である。油作第2遺跡と圀護台遺跡は9世紀いっぱいを経て集落の形成がほぼ終了しており、高沢遺跡と久我台遺跡は10世紀代にも集落が継続している。しかし、高沢遺跡においては激減というべき様相を見せ、10世紀前葉を経て終結するのである。このうち油作第2遺跡は先にも触れたように“a類型”とした中では特異な集落である。人口動態においてかなり滅茶苦茶な曲線を見せた後に、9世紀後葉突如として堅穴住居・掘立柱建物が激増し10世紀初頭をもって消滅するのである。このように掘立柱建物が急増する油作第2以外の“a類型”の集落遺跡—圀護台・久我台・高沢の3遺跡は、総量で見た場合掘立柱建物の棟数はかなり少なく、最後まで堅穴住居中心の集落であることが分かる。

〈b類型〉

今回の分析対象とした遺跡の中では村上込の内遺跡のみであるが、萱田遺跡群、山田水呑遺跡もこの類型に属する。しかもそのうちの“b-i 類型”としたものに相当するのである。

村上込の内遺跡を見てみると8世紀中葉に集落形成を開始し、9世紀前葉にピークを迎え9世紀代の終了とともに集落が消滅する。

萱田遺跡群については堅穴住居に対する掘立柱建物の比率の高さが問題となり、山田水呑遺跡についてははそれに加えて集落の全容が捉えられるだけの面積が調査されていないために、今回の分析対象からは除外したのであるが、単純に堅穴住居のみを比較対象とすると以下のようになる。

まず萱田遺跡群である。個別の遺跡ごとには較差があるが、群全体で見た場合8世紀中葉に集落の形成を開始し、ここで最初のピークを迎える。次の8世紀後半には一時衰退傾向を見せ、9世紀前半に群として最大のピークを持ち、9世紀中葉から長期の衰退傾向を見せ始め、10世紀前葉を経て、集落は消滅するのである。次に山田水呑遺跡である。8世紀前葉から集落の形成が開始され、8世紀中葉にピークを持ち、8世紀後葉から衰退傾向に入り、9世紀の後半で集落の終焉期を迎えるのである。前述のとおり、萱田遺跡群と山田水呑遺跡に関しては掘立柱建物群を除外し、さらに萱田遺跡群については住居の軒数のみを比較対象としているので、実

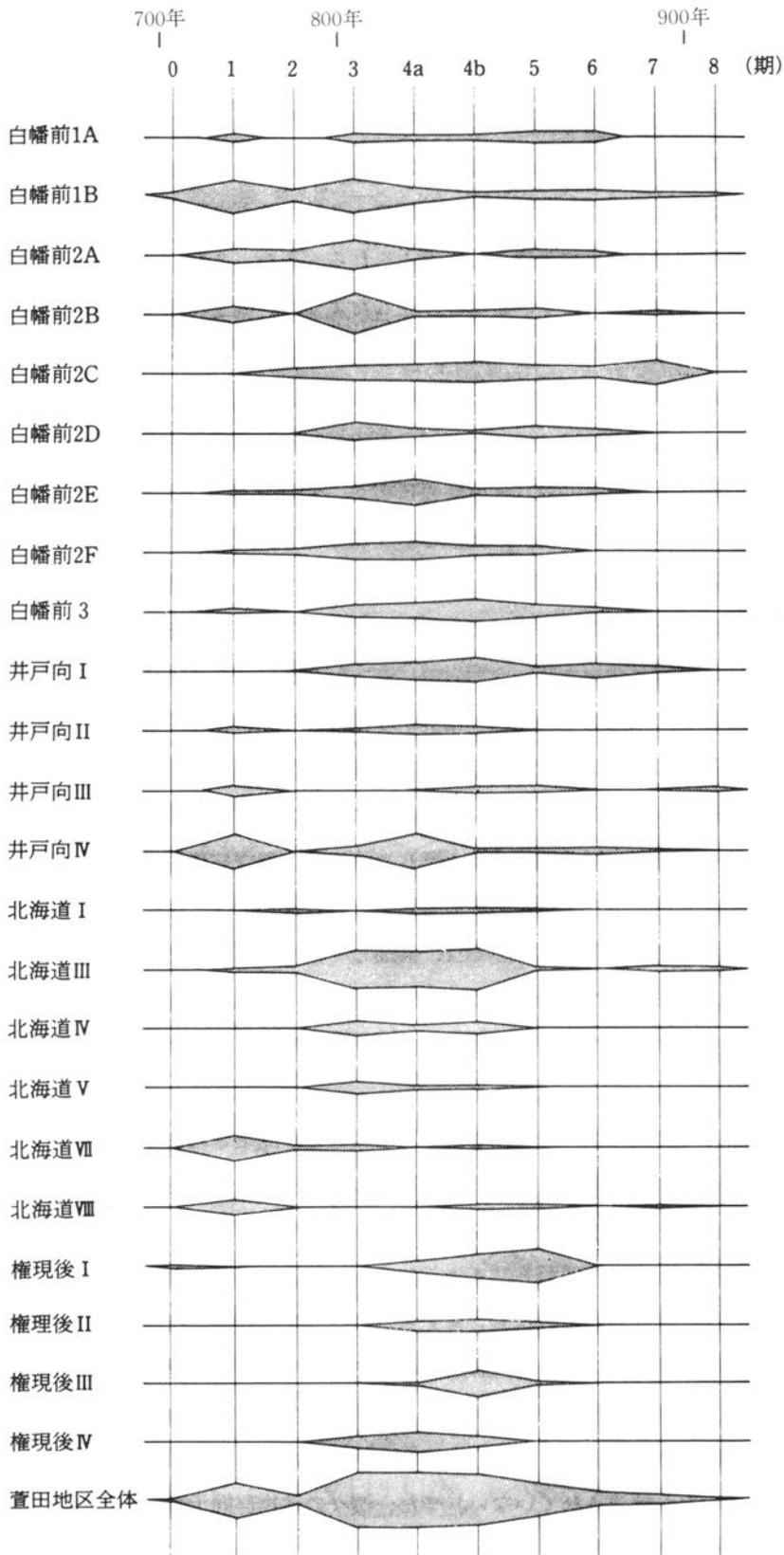


表6 萱田遺跡群竖穴住居数変遷図(大野1991より転載)

際はこのように単純化できないものである。

以上の様相を比べて見ると、村上込の内遺跡と萱田遺跡群は地域的に近接していることもあり、かなり似通った傾向を見せていることが分かる。山田水呑遺跡はこの二遺跡とは若干異なった傾向を見せるのであるが、8世紀中葉にピークを持ち8世紀後葉に衰退傾向を見せる、という局所にのみ目を向けた場合は萱田遺跡群との間に共通性を見いだすことができる。

なお、“b-ii”類型に関しては今回ここであえて分析対象とすることは避け、類似資料が報告書としてある程度の量に達した段階で、再度検討してみたい。

4. 人口動態の背景

以上見てきた人口動態からどのようなことが読み取れるであろうか。そして、そこにはどのような歴史的背景が存在するのであろうか。

1. “a 類型” 集落形成開始期の背景

まず集落の形成開始時期の問題である。高沢遺跡、団護台遺跡、久我台遺跡などの“a 類型”とした集落遺跡に見られるように、古墳時代から形成が開始される拠点型の大規模集落の場合、その多くは従来の土器形式でいうところの“鬼高期”に集落の形成が開始される場合が多い。しかもその多くは6世紀代の前葉から後半頃に集中する傾向が強い。これは房総半島に限らず、関東地方の各都県でもほぼ同様の傾向を示していると考えられる。この段階での集落数や人口の急増については、今のところ特に納得がいくだけの明瞭な解答は見出されておらず、現象論の段階で留まっているのが実状である。ただし、この時期以前の集落数と比較した場合、その数量の増加はまさに激増と言うべきものである。これは狭い一地域だけを検討対象として解答が得られるような問題ではないのである。かつて埴原和郎氏がシミュレーション研究として、古代の日本において大量の渡来者が存在した可能性を指摘されたことがある(埴原1987)。この現象が房総の地にまで直接的に影響を及ぼしているかどうかは不明であるが、本論文でいう“a 類型”集落の形成開始の要因として、この問題などは考古学の側からも真剣に検討すべき内容ではないだろうか。

2. “b 類型” 集落形成の背景

これに対して“b 類型”とした集落遺跡はなぜ8世紀前葉、もしくはさらに遅れた時期に集落の形成を開始するのであろうか。人口の自然増に伴う集落の拡大などという単純な現象だけではなさそうである。8世紀前葉の集落の形成開始の背景には、律令国家等の公権力を想定せずにはいられない場合が多い。例えば、我孫子市日秀西遺跡を考えてもらいたい(上野ほか1980、大野1986)。これは相馬郡正倉と考えられる多くの掘立柱建物群が検出された遺跡であるが、正

倉建設以前にはごく普通の集落遺跡であった。それが正倉の建設に伴い強制的に移住させられているのである。かつて直木孝次郎氏が指摘した“計画村落”の問題(直木1965)に対して、高橋一夫氏が考古学の側からアプローチしたことがあるが(高橋1979)、8世紀以降の集落の変動や移動の多くには公的権力が直接的に、もしくは間接的に関わっていた場合が多いのではなからうか。

“b類型”のうち“b-ii”とした8世紀後半以降に形成開始期を持つ集落遺跡については、どのような解釈を与えればよいのであろうか。今回、この時期の資料の分析表を掲載することができなかったので、あえてここで触れるべきではないのだが、予見として記しておきたい。このことについては、“a類型”や“b-i 類型”の集落における人口の変遷と関連づけて考えると、答えが見えて来るようである。囲護台遺跡・久我台遺跡・萱田遺跡群などでは8世紀後葉乃至第4四半期において集落の衰退傾向が見える。萱田遺跡群や高沢遺跡などではこのあと再び持ち直すのであるが、囲護台遺跡・久我台遺跡などでは以後長期の衰退期へと向かってしまう鍵となる時期でもある。そのような時期に一方では集落の形成を開始する遺跡が存在する。これは単純に考えれば移動以外の何ものでもない。しかし、その数がまとまれば、これは単純な移動ではなく、何らかの社会的背景が存在すると考えるのが普通であろう。

ここで改めて思い起こされるのが先に記した、直木氏による“計画村落”の問題である。直木氏によれば奈良時代の“計画村落”の中には、初期庄園の成立に伴う庄園村落というものがある。房総においては8世紀後葉、もしくは第4四半期からの成立であれば、それは実例として存在するのである。“藻原荘”がそれである。藤原黒麻呂は宝亀5(774)年に上総介に任ぜられ、同8(777)年に上総守となった。以後同11(780)年に治部大輔に転じるまでの6年間に、藻原牧を手に入れ“藻原荘”を開いたようである。房総半島においては文献上から明確にできる初期庄園資料はこの程度であるが、期を一にするかのようにこの時期に集落の形成を開始する集落、衰退傾向を見せる集落の双方が存在するのである。別にこの流れがすべて藻原荘に集中しているというのではないであろうが、社会的にそのような方向に向かう時期であったと考えることは無理なことではないだろう。つまり、拠点集落の衰退傾向と新規集落の形成開始とは表裏一体の現象であり、“藻原荘”のような求心力の強い機構の存在が大きく関与していた可能性はかなり高いと考えられるのである。そしてこの現象には農民の浮浪・逃亡という状態を生み出す国家機構といったものが、社会背景としてさらに存在するのである。

勿論、新規集落の成立および拠点集落の衰退要因はこれだけではない。俘囚の移配・集住といったものも新規集落の成立要因としては大きなものであろうし、柵戸人として東北地方に移住させられた人々の存在も忘れてはならないのである。

3. 9世紀における小安定期の背景

村上込の内遺跡は9世紀前葉に最盛期があり、高沢遺跡は9世紀中葉に再度の盛期を迎える。8世紀後葉以降長期の衰退傾向に入っている久我台遺跡も、9世紀後葉においてわずかながら盛り返しの数値を示している。村上込の内遺跡は“b-i 類型”であるからこのような動向にはある程度の納得が行くのであるが、高沢遺跡のような古墳時代以来の拠点集落、つまり“a 類型”の集落におけるこのような動向は何を意味するのであろうか。この問題に対しては、実は今回解答案を用意することができなかった。拠点集落そのものが荘園体制の中に完全に組み込まれてしまったことの結果という解釈も成立するかも知れないが、この解釈は現段階では実証性に欠けるし、説得力も弱い。

4. 集落の終焉

今回検討の対象とした集落は9世紀中に集落の終末を迎えるか、もしくは10世紀においてほぼ消滅している。10世紀代において集落遺跡が台地上からほぼ消えてしまう傾向は、房総半島の広い地域において共通の現象である。土器研究の上においても10・11世紀の資料にはあまり恵まれておらず、中世の土器・陶磁器との間は、限られた資料によって細々と繋がっているというのが現状である。今までの遺跡別・類型別の検討からも分かるように、9世紀後葉以降に集落の最盛期を持つ遺跡というものは一般的ではないのである。勿論、先に挙げた袖ヶ浦市西寺原遺跡のような例は存在するが、これは例外中の例外である。つまり、多くの遺跡は9世紀代のどこかの時点において大きく衰退を始め、その世紀の内に終わるか、もしくは10世紀または11世紀まで細々と続いて終了するのである。関東において10世紀とは平将門の時代である。将門の乱は集落の変遷から見ても、社会背景として在地において確実に準備されていたと見るべきなのかも知れない。

5. おわりに

はじめに、においても述べたように、かつて久我台遺跡において行った分析結果が果たして普遍的なものなのかどうかを確認するのが小論執筆の契機であった。だが、統計処理からものを言おうとするには、まだまだ取り上げた資料の数が足りない。更には、少ない資料からより平均的な統計結果を取り出すためには、無作為抽出の標本資料を用いなければいけないのだが、これも最初に述べたとおり資料の選別の後に統計処理に入っている。つまり、あらゆる点において欠格事項を有する統計ではある。だが、一遺跡の検討結果から推論を巡らせていた時に比べると、推論そのものも若干足腰の強いものになったように思える。今後、統計処理対象遺跡の数をより増やし、掘立柱建物も検討対象に取り込み、更にそのほかの遺物群とも関連性をも

たせ、より鮮明な古代集落像というものを描き出して行きたいと考えている。

註

(1) 久我台遺跡には11世紀の住居もわずかに検出されているが、今回は検討対象外とした。

引用・参考文献

- 天野 努ほか 1974『八千代市村上遺跡群』(財)千葉県都市公社
- 天野 努・平川 南・黒田正典 1989「古代集落と墨書土器—千葉県八千代市村上込の内遺跡の場合」『国立歴史民俗博物館研究報告』22 第一法規
- 上野純司ほか 1981『日秀西遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 大木英行・寺内博之・木川邦夫 1990『成田市都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』成田市団護台遺跡発掘調査団・成田市教育委員会
- 大野康男 1986「下総国相馬郡正倉跡の再検討」『千葉県文化財センター 研究紀要』10 (財)千葉県文化財センター
- 大野康男 1991『八千代市白幡前遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 阪田正一 1983「古代の集落—東国の集落」『日本歴史考古学を学ぶ(上)』有斐閣
- 関口達彦・笹生 衛ほか 1990『千葉東南部ニュータウン17高沢遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 高橋一夫ほか 1979「東国集落遺跡の検討」『古代を考える』20 古代を考える会
- 直木孝次郎 1965「古代国家と村落—計画村落の視角から—」『ヒストリア』42 大阪歴史学会
- 萩原恭一ほか 1988『東金市久我台遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 埴原和郎 1987「シミュレーションによる古代日本への渡来者の数の推定」『人類学雑誌』95-3 日本人類学会
- 松村恵司ほか 1977『山田水呑遺跡』日本道路公団・山田遺跡調査会
- 村山好文・長内美知枝ほか 1985『平賀』平賀遺跡発掘調査会
- 渡辺修一 1992「「竪穴住居」か「竪穴建物」か」『研究連絡誌』35 (財)千葉文化財センター

(財団法人千葉県文化財センター成田調査事務所)